

韓国風水論はいかに展開したか

(崔元碩著『人間の地理 韓国風水の人文学』pp.19-53)

한국풍수론은 어떻게 전개되었나

(최원석저 “사람의 지리 우리 풍수의 인문학” pp.19-53)

How Did the Korean Feng Shui Thought Develop?

澁谷鎮明*

韓国で展開した風水論の歴史的・空間的な姿を概観し、これを通じて韓国風水論のアイデンティティと特性を考察してみよう。東アジア風水論の普遍性¹⁾に照らし、韓国風水論の展開過程と特殊性がどうであったのかについての関心は風水史において明らかにしなければならない重要な主題であることには間違いない。これはまた、風水で伝統時代の韓国人の自然に対する認識と態度、社会文化の中に反映された自然と人間の相互関係と、その歴史的意味を照明する作業でもある。

風水史は、風水理論体系の形成と発展過程を扱う風水理論史と、風水文化要素の社会文化的展開過程を扱う風水文化史に区分することができる。風水理論史は専門知識人の洗練された知識の認識と論理体系として生産・展開した側面があり、風水文化史は社会集団と地域住民が、生活史の過程における実践の方式として消費・活用した側面がある。

風水理論体系の生産と形成、そして理論的發展は中国が主導し、韓国と周辺国家は中国が作った風水理論体系を地域環境と歴史的・文化的特色に合わせ適用し、あるいは変容させた。東アジアの風水文化史において、韓国的特性は、現代まで多くの地域で伝承される村単位の風水景観、風水説話、風水地名、裨補風水などによく表れる。

韓国の風水論の展開について、先行研究の成果の中で重要なものをレビューしてみよう。村山智順は『朝鮮の風水』にて墓地風水と住居風水信仰を韓国社会と文化の特質を成す根本的現象の一つとみて、歴史民俗学的に考察した²⁾。しかしながらこの書は韓国風水論展開の全体の流れと、それに伴う時代的特徴を通史的に論議することはしていない。

このような限界は、李丙燾がある程度克服した。彼は『高麗時代の研究』(1947)において、高麗時代と朝鮮初期の風水図識の歴史的展開過程を政治史的観点から論究した³⁾。李の研究は高麗時代の風水論展開の歴史的特色を時代区分し、深く考究した先駆的な成果として挙げられる。ただし時期的に高麗～朝鮮初期に限定された政治史的論議であるという限界があった。

韓国風水論についての通史的論議は崔昌祚が著した『韓国の風水思想』(1984)で成し遂げられた。この書では風水理論を体系的に分類し、現代的な解釈をただけではなく、地理学的観点から都邑と集落風水分野を集中的に検討した⁴⁾。しかしこの書は東アジアの普遍性に基づいて韓国風水論を位置づけてはいない。

このような問題点は尹弘基の『韓国の風水文化：東アジア風水の探究』(2006)にて一定程度克服された。この書では風水地理説の起源、韓国風水論の導入と展開、集落風水などに関す

* 中部大学国際関係学部国際学科

る論議を、東アジア的範疇から「韓国的特色」であるという見地で考察した⁵⁾。ただし韓国の風水理論史と風水論の歴史的展開過程を通時的に論議してはいない。

以上のような研究成果を基に、韓国風水論の展開過程を通時的に探究し、合わせて歴史的・空間的展開過程を社会文化的に照明したい。

韓国風水論は、伝統時代の政治社会的条件と結びついた特色を帯び、歴史的、地域的に展開していった。

風水論は早くから中国より朝鮮半島に流入したが、新羅時代には王朝勢力に独占され王陵の造成に活用された。高麗王朝では、仏教と風水が結びついた裨補風水論が国土経営のイデオロギーとして活用され、都邑風水論として運用された⁶⁾。朝鮮時代前・中期に入ると、朱子学的イデオロギーの拡散と合わせて墓地風水論が盛行した。朝鮮後期には実学者を中心に住居風水論が活発に展開された。

空間的にも、王都から始まり次第に中央権力の統制を受ける地方の都邑、その周囲の村まで風水による立地と風水景観が拡散していった。場所的に王室レベルでは宮殿と陵墓はもちろん、胎室に至るまで全般的に風水が適用された。特に高麗時代から朝鮮時代に至るまで、風水論が社会文化と国土空間に及ぼした大衆的な影響は非常に大きく、その産物として遊山録、風水図讖記、山図などの文献記録だけではなく、風水地名、風水形局、風水説話などの民間伝承が豊富に残っている。多くの伝統的集落で見られる風水景観は持続可能な文化生態の土台と条件をなす景観遺産でもある。

しかしながら、韓国では中国に比べて風水理論の面で独創的な見解と発展した論理を採ることは難しい。中国は形勢論と方位論をはじめ、歴史的過程で風水理論に対する批判的論理が多様に展開され、それが著述と文献に蓄積された。韓国は中国の風水論を導入し、社会的・空間的

言説として運用し、韓国の風土と実情に合わせて適用することに重きが置かれた。

そのため、韓国の風水論の探究は、風水書を基に理論体系の発展過程を分析するよりも、風水理論がいかにして社会文化的な力によって解釈され、その過程でどのような部分が強調されたり除外されたりし、どのような主題と構造(社会制度・政治権力・社会階層のイデオロギーなど)で解釈し活用するののかについての社会文化的アプローチが必要である。

韓国では、時代ごとに風水論の歴史的・空間的特性が異なっている。韓国風水論の展開過程を歴史的に概観するならば、重要な社会思想的言説として形成されたのは、裨補図讖的風水論、朝鮮前・中期の朱子学的風水論、朝鮮後期の実学的風水論に要約される。これに関連して展開された時代別の空間的特色は高麗時代の都邑風水論、朝鮮前・中期の墓地風水論、朝鮮後期の住居風水論(村落風水論・住宅風水論)に大きく分けられる。同じ朝鮮時代であっても朝鮮前・中期の性理学的風水論の倫理性は朝鮮後期の実学的風水論の実用性と対比される。

したがって韓国風水論の歴史的アイデンティティを成す高麗王朝の裨補図讖的風水論、朝鮮王朝の朱子的・実学的風水論は、その背景とともに重点的に探究しなければならない対象である。そして韓国風水論が展開される過程で理論的に形勢論が優勢に活用されたという点も特色として考察しなければならないテーマである。高麗時代には都邑風水論が活発であったが、なぜ朝鮮前・中期には墓地風水論が盛行し、朝鮮後期には住居風水論が活発になったのか、時代別の風水論の特色とアイデンティティを究明する作業は興味深い研究課題でもある。

韓国風水論の展開過程においてみられる図讖との関係も関心がもたれる点であろう。図讖とは、図や印などで未来の吉凶を予言するものである。高麗時代には風水と図讖が結びつけられ

た風水図讖が政治社会的に大きな影響を及ぼしたが、これは高麗時代の風水論の特色ともいえる。しかし儒教的社会理念と合理主義に根拠を置いた朝鮮王朝において、図讖は儒学者より強く批判を受け、厳しく排除された。ただし朝鮮中・後期に、民間では『鄭鑑録』類の風水図讖書が広く流行した。

風水論を社会文化的に展開しようとする際には、それこそ時代別にどのような社会階層が風水文化を主導したのかという問題と関連して論じなければならない。韓国風水論の形成と展開過程には、社会的に政治支配権力層と知識人階層が大きな影響を及ぼした。権力層は風水論を政治的手段として言説を活用し、知識人は風水論の社会的比重が大きくなると風水言説を唱道した。高麗時代には僧侶知識人が裨補の風水論を主導し、朝鮮時代には儒教知識人が儒学的風水言説をリードした。

風水論の導入と運用

新羅・高麗時代の形勢論と風水図讖説

韓国風水論は、中国の風水論を導入し、政治社会的に運用し国土空間に適用しながら変遷していく軌跡であると言えることができる。したがって、中国の風水が韓国にどのような影響を与え、韓国は中国の風水論をいかにして受容・運用したのかという歴史的過程を理解しないとならない。

中国の風水理論には大きく見て形勢論と理気論がある。形勢論が理気論よりも先に発展した。形勢論は立地した地形（山水）の外観と質感で場所の吉凶を見て、理気論は配置された場所の向き（方位）で場所の吉凶を判定するが、この時にはよく羅経（訳注：風水用コンパス）という道具を活用する。中国の場合、山と河川が多い長江南方地域で形勢論が発達したように、韓国でも形勢論は山や丘陵地の多い地域に主に用

いられ、理気論（方位論）は平野地帯に活用される傾向があった。宋代以降には莊子・朱子の理学が展開した政治論理の影響を受け、理気論が発展することができる理論的背景が準備されていた。

もちろん風水で場所を定めるときには、一般的に形勢論と理気論をともに活用した。このような現象は中国と韓国は同様であった。まず形勢論の方法で立地すべき地形のおおよその良し悪しと形態を判断し、次に羅経を利用して向きを見て配置関係の理気論の吉凶を見る。

形勢論は主に山の連なり、河川の流れる方向と様子などのような可視的・実際の自然環境と関連している。形勢論の特徴は唐代の風水師、楊筠松の理論から明確に表れる。彼が著した『撼龍經』、『疑龍經』などは山の形勢を解釈する論理で構成されている。韓国でもこの二つの書は、朝鮮時代の観象監で実施した風水の科挙試験の科目でもあった。形勢論が扱う山の形勢は実際に目に見えるものであるので、広範囲に拡散され朝鮮時代の庶民層にも大きな影響を与えた。

理気論は山川の気を考察するとき、羅経を重く用い、周易の原理に従って八卦、十二支、天星、五行を四大要綱としている⁷⁾。理気論は宋代以後、理学的論理が洗練され、羅経が広範囲に應用されるにしたがって、勢力が拡大した。理気派の風水は数と理の相関性を強調するので、その理論も複雑で難しい。

韓国では中国の形勢論と理気論を双方とも受け入れ、国土空間に広く適用した。時期的にみると、形勢論が先に入り、理気論が後から導入された。形勢論は羅末麗初より社会に本格的に影響を及ぼした。形勢論の思考方式の糸口は、すでに新羅時代に初期の姿が登場する⁸⁾。

（脱解王が）吐含山に登って石積みを作り、7日の間留まって城中に住むべきところがあるかと思めると、ちょうど三日月のように丸

い丘があり、地勢が長く住むべき場所であった。

脱解（在位57-80）が定めた場所は、以後新羅の王宮が入り、現在の慶州の半月城の場所であたる。注目される内容は「丘が三日月のように丸く、長く住むべき地勢」という脱解の立地観である。半月を、満月になる可能態を帯びた吉な現象として認識する初期的な風水形勢論（形局論あるいは喝形論⁹⁾）の思考方式である。

中国の風水論が韓国に入ってきた時期を知ることができる最初の歴史記録は、崔致遠（857-?）が著した『大崇福寺碑文』である。時期は798年のことで、ここに青烏子という中国漢代の風水師が登場する。青烏子は『青烏経』という風水書の著者として知られる。主に形勢論が反映された『青烏経』は、『錦囊経』とともに朝鮮王朝の重要な風水の教科書である。

中国風水論が新羅に入った経路は二つに分けることができる。一つは王室を経て受容した経路である。当時唐では風水論が広く流行していたが、唐と文物の交流があった新羅王室に中国風水論が導入されたことは当然のように思われる。またもう一つは、中国に留学した後に帰国した僧侶や知識人が持ち込んだものである。統一新羅末には様々な僧侶と知識人が中国に留学して帰国したが、その過程で自然に中国風水に接して学んだ蓋然性がある¹⁰⁾。その他に中国の商人が船に乗って訪れ物々交換を行い、港を中心に風水書が民間の知識人に伝えられたこともあっただろう。王室に入ってきた風水は主に宮殿や王陵の場所を選ぶ際に使われ、僧侶がもたらした風水は寺や住居の場所を選択するのに活用された。

羅末麗初には、主として「山川の順逆」を調べる形勢論が支配的な風水理論として影響を与えたものとみられ、高麗時代に理気論が強く適用された痕跡は見出すのが難しい。高麗の太祖

26（943）年の「訓要十条」にある「全ての寺は道説が山水の順逆を見て開創したものである」¹¹⁾という表現は、当時盛行した風水形勢論の支配的情况をよく反映している。

この時期に形勢論が広まった理由は何だろうか？ 前述のように中国の風水理論自体が、形勢論が先に構築され、理気論は宋代以降になってはじめて盛行したために、韓国でも理気論は朝鮮時代になってようやく力のある論理として影響を及ぼすようになった。直接的には新羅末に唐に留学した僧侶知識人が、主に形勢論が盛んであった江西地方の禅宗を学びながら風水形勢論も同時に習得したためと思われる。それ以後も形勢論は時代と地域を問わず、広く流行したが、山が多い韓国の地形風土に適用するのに理論的に合っており、理気論に比べ理解しやすく、広く受容されたためである。

高麗時代には、王室の風水的関心と必要性に伴って中国の風水書が着実に導入された。『高麗史』によれば、高麗顯宗13（1022）年に韓祚が宋から帰国したが、宋の皇帝が下賜した書に『陰陽二宅書』があり、これは陰宅書（墓地風水書）と陽宅書（住宅風水書）を含んでいるものと理解できる¹²⁾。この書が形勢論と理気論のうちどのような部類に属するのか確認することはできないが、時代的背景から見て理気論が強い風水書である可能性がある。したがってすでに高麗朝に理気論の書籍が流入し、風水の現場で使われていたことを推定することは難しくない。高麗は中国の理気論を、裨補論を媒介として図讖と結びつけることで、より洗練され、強力な思想体系を備えるようになった。韓国で流行した理気論は異なった思想との有機的な結合を通じて発展したという特徴を見せている¹³⁾。朝鮮初期に理気論の著述である『胡舜申』が漢陽（ソウル）を国都として決定する過程で主要な論理として影響を及ぼし、以後観象監の風水科学試験の科目として採択された。理気論は朝鮮王朝

と民間にわたって羅經の活用を通じ場所選別に広く適用された。

高麗王朝の書雲觀¹⁴⁾では、地理業という分野で科挙を実施し風水専門人を募った。「地理業」という表現を見ると、当時は風水と言わず「地理」という一般名称が用いられたことが理解できる。科挙で地理業に及第した者には一定の称号と地位が与えられた。高麗の文宗30年の記録によれば、地理業の別賜田の受給対象者には、地理生、地理正、地理博士、地理師などの呼称と位階が出てくる。彼らは王宮や寺院の場所、胎を埋める場所などを選定する仕事を担当した¹⁵⁾。

この中で地理生は科挙に及第したばかりの者を指す語であり、経歴を積むにしたがって地理正、地理博士に進級し、地理師は風水専門人としては最も高い職階であった¹⁶⁾。関連して風水知識人として地理僧も省くことはできない。延嘿などの地理僧は、国家あるいは王室の寺院の位置選定、国師や王師など高僧の葬礼、国王の巡駐所指定を担当した。高麗時代のような政治的で官僚化した地理僧は、東アジア全体で見ても独特な現象であった¹⁷⁾。

高麗時代の風水科挙試験科目としては、『新集地理経』、『劉氏書』、『地理決経』、『経緯令』、『地鏡経』、『口示決』、『胎蔵経』、『蕭氏書』などがあった。しかし高麗時代の風水地理分野の科挙試験科目に出てくる書物は伝えられておらず、中国の風水書の中にも書名は見出しにくく、その理由が何なのかは学界の課題として残されている。

このうち『経緯令』は、高麗肅宗7(1102)年、中書門下省で南京(漢陽)に離宮を造成する際に、この書を根拠とするよう王に上奏したことがある。また朝鮮文宗元年に鄭安宗が上疏において「唐の一行(673-727)が著した『経緯令』」を根拠に主張を述べたものと見られ、朝鮮初期までは主要な風水書として活用された

ようである¹⁸⁾。『劉氏書』は、漢の淮南王の子劉安が賓客と方士を集めて著した『淮南内外書』と推定され、『地鏡経』は馬国翰が編纂した『玉函山房逸書』中の「地経図」に似るが、生物地理学というべき内容で、6世紀の梁で記されたものとされる¹⁹⁾。しかし上の推定はそもそも書の内容が風水とは距離があるため慎重な検討が必要である。そして『胎蔵経』は、同じ書名で『文宗実録』に内容が一部紹介されているが²⁰⁾、高麗時代の『胎蔵経』と同一であるとの確認はできない。ただし書名から見て胎盤を吉地に奉安する方法と、発福を主要内容とする風水書であることは確実である。

胎室は王室で胎児を出産した後、胎盤を安葬するため造成するとき、高麗王室で風水的な理由と目的で明堂の地を選定したということが理解される。胎室風水は朝鮮時代にも継承され、厳格に施行された。子が生まれれば胎盤を胎室に埋め、王宮で生活して王陵に埋葬される、王室のすべての生活史の行路が風水と関連していた。これは、東アジア、特に韓国の王室風水文化史にすぐれてあらわれる興味深い現象である。朝鮮王室の風水でも墓地(王陵)風水、都邑(王宮)風水とともに胎室風水は重要な部分を占めていた。『朝鮮王朝実録』においてもあらわれるが、朝鮮王室の論議において胎室は、人間の性格と人智、健康、出世などと関連するものと主張されており²¹⁾、良い地に胎盤を安葬することで当事者が風水的所応を得て一人の健康だけではなく、社会的成功も得られるということである。

このような胎室地の発福は風水的論理から展開される。墓地風水が祖先の骨を媒介に地の生氣と感應することで、子孫が発福するという論理を持つのに比して、胎室風水は、当事者の胎盤が吉地の生氣に感應することで「本人」が発福するという論理に基礎づけられる。当事者の発福という風水の論理構造は住宅風水の発福論

理とも類似している。住宅風水は本人が風水的に良い環境に居住しながらその吉の気運を受けるという論理であるためである。このような背景となる論理にしたがって、高麗と朝鮮時代の王室の胎室地は風水専門家が選定しており、既存の埋葬された胎室をより良い場所に移動させたりもした²²⁾。

参考までに延べるならば、胎室の風水的立地条件と地形的パターンには共通点が発見される。それは胎室地が低い山の頂上部に立地しているという点である。このような立地の様相は、ちょうど漢方医学で人体の頭頂部である百会穴の経穴に対比される位置であるという。胎室地の一般的地形地勢条件を見るならば、墓地の明堂形局とは立地様相が異なり北玄武・南朱雀・左青龍・右白虎などの明堂の必須要件が付随していない。このような立地特性と類型が見られるわけは、胎室の立地選定準則があるためである。胎室の風水的条件に関し『胎封謄録』では、「胎封は山の頂を使い、元来来脈や左青龍・右白虎や、案山・朝山などが無い」²³⁾と立地地形の特性を要約した。このような胎室風水は朝鮮時代後期になるにつれ、比重が縮小し弱化する。

他方で高麗時代の風水科学科目と、朝鮮時代のそれは全く異なり、継承される面がないということも興味深い現象である。朝鮮時代の風水科学科目と比較してみると、高麗時代は専門的な風水理論書の色彩が弱く、風水図讖書と見られる書が何種か含まれていることも高麗時代に展開された社会的風水言説の傾向に照らし留意する必要がある。

一般的に図讖は、国家の興亡盛衰と人間の吉凶禍福を徴驗する予言・密記類の総称である²⁴⁾。讖記を韓国ではよく秘記・密記というが、「讖」は秘かに隠されていて言語や文字で将来起きることを予言・暗示するものであると言える²⁵⁾。将来の運命を指示する点では占卜とほぼ同じであるが、図讖は大部分が国の興亡・推移のような

社会的運命観である点で異なっている²⁶⁾。図讖の社会思想的性格について注目されることとして、社会変革期の図讖は社会変革を推し進める思想的役割を果たす点がある。したがって歴史の変換期の図讖には社会変革の熱望と意図が反映されている。

韓国の図讖は、三国時代より明確にあらわれるが、よく風水地理と結びつき、「風水図讖」として実行・展開された。道誡が活動した羅末麗初には、民衆の欲求と社会変革の渴望が反映した風水図讖が新たに台頭した²⁷⁾。図讖と風水の結合は、形勢論の理論的傾向とともに、高麗時代の風水論のまた異なった重要な特徴である。朝鮮時代にも風水図讖は、『鄭鑑録』²⁸⁾のように民間レベルで流行したが、高麗時代は政治支配権力層の言説において風水と図讖の結合が明確に表れた。

高麗時代には風水図讖説が流行し、社会思想として大きな影響を及ぼした。風水図讖に関する書は、裨補風水論で高麗時代を風靡した道誡に関連づけて名づけたものが多かった。高麗中期の12世紀初めには、風水図讖書が氾濫し混乱した状況となった。そのため睿宗元(1106)年には「陰陽地理に関する様々な書を王室で新たに整理し『海東秘録』という書一巻が編纂された」²⁹⁾とある。ここでの「陰陽地理」は風水図讖を意味すると思われ、『海東秘録』という書名だけを見ても多分に図讖書の性格を帯びていることが理解できる。高麗時代の風水論の特徴である裨補風水論も後代になって図讖と緊密に結びついた。これにより高麗中・後期の社会的弊害が生じ、後に朝鮮初期の官僚と儒学者たちに集中的に攻撃と批判を受けた。

朝鮮時代の風水地理論

朝鮮時代の風水論は、高麗時代と理論的原理は同じであるが、社会文化的展開は異なっていた。また中国風水書の風水理論をそのまま用い

たが、これを具体的な場面に適用し、特定の内容を運用した点については中国と異なる。

「風水」という用語は朝鮮時代に入り一般化し、地理（学）と同じ意味で用いた。高麗時代には地理という用語を一般的に用いるのみで、風水という語を用いた痕跡は見出しにくい。朝鮮時代には風水学を、地理学という語以外に陰陽学、陰陽風水学などとも呼んだ。世祖12（1466）年には風水学を地理学という名称に直し、その年に書雲観を改称した観象監において地理学関連業務を専門的に担当した。観象監は、朝鮮時代に天文・地理・命課などの業務を担当した官署で、地理学（風水）担当分野としては、官員に地理学教授（従六品）1名と、地理学訓導（正九品）1名を置き、地理学生徒を10名置いた³⁰⁾。

朝鮮王朝では高麗王朝と異なり、儒教的イデオロギーと儒学的合理主義に根拠を置いており、仏教思想が含まれた道説の裨補風水論と、予言的・迷信的図讖思想は儒学者から批判を受け排除された。1417年に太宗は図讖術書が世間を乱し人々を惑わすとし、図讖を禁じたと王命が下され、個人が所蔵する全国のすべての図讖術書を集めて燃やしたという³¹⁾。高麗王朝では風水図讖が支配層と知識人階層に広く影響を与え、風水関連の科学科目も図讖書の色彩を帯びていたが、朝鮮王朝では図讖を排除した風水論だけを運用したのである。ただし庶民の間では『鄭鑑録』等の風水図讖書が朝鮮後期に流行した。

したがって朝鮮時代には、高麗時代の風水図讖が継続されたが、予言的な内容から抜け出し理論的に整備された純粋な風水地理学の姿に変化したという点で、相違点をとらえることができる。ここから常に論理的な基礎の上に理論的根拠を見出そうとする性理学の影響が大きく奏効する蓋然性を考えることができる³²⁾。そのうえ朝鮮王朝には中国の形勢論と理気論を含む専

門的な風水書が大挙受容・研究され、風水理論を理解する水準が高まった。したがって胎室・王陵や都邑地選定などの風水的論議において、高麗時代より一段と洗練された解釈がなされ、適用されたのである。

朝鮮王朝の風水論の理解水準を反映し、中国の風水理論書の中で形勢論以外に理気論を扱った書も多く輸入され、形勢論と理気論の双方が社会的に大きな影響を与えた。

朝鮮時代の風水関連の科学科目には、『青烏経』、『錦囊経』、『明山論』、『胡舜申』、『地理門庭』、『撼龍経』、『捉脈賦』、『疑龍経』、『洞林照膽』などがあつた。これらの書は大部分中国の形勢論と理気論の主要な風水書であり現存している。その中で『地理門庭』の著者は不明であるが、『捉脈賦』は陶侃が、『洞林照膽』は范越鳳が著した。明代の徐善繼・徐善述の著した『人子須知』（1564）も形勢論の著述として朝鮮後期の知識人の間で広く筆写され読まれた。現存する書として主要なものを見るならば以下の通りである。

『青烏経』は、漢代の青烏子を書いたものとして知られるが、宋代以降の偽作である可能性が高い書である³³⁾。韓国にいつ導入されたのかは明らかでないが、朝鮮王朝で『錦囊経』とともに風水の必須図書に指定されたことがある。

『錦囊経』は、郭璞（267-324）の著述として知られるが、実際には唐代やそれ以後に書かれたという蓋然性が大きい。生氣や形勢を主として論じた³⁴⁾。書は気感編、因勢編、平支編、山勢編、四勢編、貴穴編、形勢編、取類編など八編で構成される。『錦囊経』は朝鮮王朝で風水の教科書として取り扱われた重要な書である。

『明山論』は、『青烏経』・『錦囊経』・『胡舜申』とともに朝鮮朝の風水学の四大科学試験科目であつた。明代に蔡成禹が書いたものとして知られるが、彼は内容を再構成しただけであり、理論

的特性は徹底して形勢論の見地で記される³⁵⁾。

『撼龍經』と『疑龍經』は唐代の楊均松の著述で、やはり形勢論に基づいて山の風水的論理を論じた。『撼龍經』は、山の形を9つに類型化し各々の形態の吉凶をみたもので、『疑龍經』は、どのような山の形勢を備えたものが、具体的な「穴」を結ぶ条件になるのかを主に論じた。

理気論が主要論理にする書としては『胡舜申』がある。『地理新法』ともいうこの書は、胡舜申が著者である。この書は理気論の見地から記され、墓地だけではなく国都（京都）、邑（州縣）、寺院などのような、住宅と生活の場の風水まで空間的範囲を広げた³⁶⁾。

朝鮮時代には理気論に基づいた風水判断に必須の用具である羅經を製作して活用した。羅經は輪図、羅盤、指南針、鐵とも呼ばれた風水用コンパスである。韓国では朝鮮中期まで輪図というコンパスが方位測定用具として使われたのち、中国から導入された専門的風水用具である羅經に次第に置き換えられ、後代により精巧な羅經を觀象監で製作・活用したと思われる³⁷⁾。羅經はいかなる風水の向法を適用したかにより異なって構成される³⁸⁾。ソウル歴史博物館などに現存する19世紀中盤の羅經は24層の構成になっており、觀象監で製作されたものと思われ、朝鮮後期に公式的な風水用具として活用されたものであったことが理解できる³⁹⁾。

ところで風水科学科目に挙げられる書は、詳しく検討すると朝鮮時代風水論の重要な特徴である墓地風水が多い。朝鮮時代の風水科学科目が墓地風水書中心であったことという事実は、朝鮮王朝が儒教的な孝イデオロギーと関連して風水を受容した社会的状況を語ってくれる。朝鮮王朝において王陵を取り巻く多くの風水的論議と言説が登場していたこともこのような背景から理解することができる。興味深いのは、高麗王朝だけを見ても風水論の社会的主流は墓地風水論ではなく、都邑風水論であったことであ

る。時代的に風水論の運用を主導する社会主体勢力の政治社会的性格とそれに伴う空間的对象が異なったために、高麗と朝鮮の風水科学科目も全く異なるほかに、空間的にも継承されなかった。

一方で民間においてあらわれる朝鮮時代風水論のもう一つの特徴は、住居風水論（村落風水論と住宅風水論）である。朝鮮後期に入り、儒教知識人が郷村各地に宗族村を成立させ、村落風水の社会的言説が盛行し、風水的立地と風水景観を備えた村が大きく増加した。何よりも17世紀前後に倭乱と胡乱、士禍など政治軍事的に内憂外患が起きていた社会の雰囲気から、儒学者たちが山林（田舎）に隠居する気運が高まったが、この時住居生活の実際の必要性から住宅風水論の趨勢と社会の雰囲気は庶民にも伝播し、多くの自然村（民村）において、風水形局論的に村落景観が再解釈され、村の林、石積みなどの裨補物が設けられた。

このように朝鮮時代に活発であった墓地風水論と住居風水論の社会的言説は、高麗時代の都邑風水論のそれと比較するとき、理論的には同様の風水的原理を適用したが、時代背景に伴った社会的性格と適用対象は全く異なっていた。高麗時代の都邑風水論は地氣衰旺説・地理延基説・裨補図讖説と結びつき、王朝の支配勢力の間に権力闘争の性格を帯びた政治社会的言説として盛行したが、朝鮮時代の墓地風水論と住居風水論は、図讖を徹底して排除し風水理論自体に集中しただけでなく、社会的運用でも儒教知識人階層が主導した風水言説であった。

朝鮮後期の知識人の間では、中国の住居風水書も多く読まれた。実学者の著述には、彼らが参考にした中国の住宅風水書と一般の風水書がしばしば引用されている。例えば徐有榘（1764-1845）は中国の風水書である『相宅経』、『陽宅吉凶論』、『陰陽書』、『地理新書』等を参考として住居風水を論じた⁴⁰⁾。民間では18世

紀後半に中国清代の趙廷棟（1736-1795）が著述した『陽宅三要』が大きな影響を与えた。この書の論理は『陽宅要訣』や『民宅三要』などの名称で再編集され19世紀以後韓国の住宅風水論を主導した。このうち『民宅三要』は、日帝強占期（1928）に密陽の孫瑜憲が中国の『陽宅三要』を、韓国の住宅条件に合わせて発展させた書として意義がある。

韓国風水思想の精髓は、択地術の原理を盛り込んだ風水書よりは、風水説話・風水歌辞・風水図識書・風水巫歌によりよく反映されている。このような民間伝統要素を分析すると韓国風水地理説の特性を見出すことができる⁴¹⁾。朝鮮後期の風水図識書として有名な『鄭鑑録』と地域住民の形局論的村落景観認識、そして全国どこでも見ることでできる風水説話等はその代表的なものである。

朝鮮後期には政治社会的混乱を経て『鄭鑑録』という風水図識書が、民間と一部の知識人の間で広く流行した。特にその中に含まれた避難・保身の地としての「十勝地」言説は朝鮮後期の庶民に大きな影響を与え、十勝地とされた場所に人口が移動する社会的原因にもなった⁴²⁾。慶尚北道豊基金鶏村など、有名な十勝地には、今も秘訣と子孫が生きている。

『鄭鑑録』類の書には高麗と朝鮮の有名な風水僧、風水知識人の名を引いた文献が編集されており、その上ここには中国唐の玄宗（712-756）代の僧侶で、著名な風水家であった一行（683-727）まで著者として登場する。『鄭鑑録』の中で「一行訣」「一行師説」などがその事例である。一行は韓国の風水説話では、道説の師匠であるという内容が出るほど韓国の人々に有名な中国の風水師である。

朝鮮後期に入り、風水文化が次第に地方の村落にも波及し、民間人には形勢論の一部である形局論的な風水の理解方式が広く流行した。形局論が庶民の間に広まったのは、擬人化・擬物

化し、理解しにくい理論風水に比して容易に理解できたためである。智異山圏域の求礼郡、河東郡、山清郡、咸陽郡管内の自然村落だけでも500を超える風水形局が見られるという事実を見ても地域住民の形局的風水認識が、いかに普遍的であったのかを推し量ることができる。

このような村落の住民の形局的風水の理解は、村の地形環境条件と文化生態的コードで関係を結び、文化景観に影響を与える結果をもたらした。伝統時代の村落の住民が村の立地環境を風水形局という象徴体系で解釈して関係を結び対応する過程で、形局的な解釈に従って新たな風水地名が作られ、既存の地名が風水的に解釈され意味が変えられる過程も見られた。住民が自然環境と関係を結ぶ風水的要素は風水地名の他にも風水説話、風水儀礼、風水裨補などがあった。このような文化生態的風水要素は、村の立地形局と関連して意味が構成され、住民が認識する村の風水的環境に影響を与えた。

韓国風水論の歴史的・空間的展開

高麗時代の裨補図識的都邑風水論

古代より韓国が中国と文化交流が盛んであったことで、中国の風水が三国時代前後に入ってきたであろうが、韓国で風水論が社会言説として形成されて政治的条件と結びつき、支配的空間論理として機能したのは高麗時代からであると見ることができる。

高麗時代の風水論の特徴は、裨補図識的な都邑風水論として要約することができる。都邑は国家や王室権力の正当性を象徴的に具現し実践する場所であり、都邑風水はそのような権威を表象し、統治体系を構築した原理であった。特に高麗時代の国土風水は、太祖王建という象徴と結合し、非常に重要な政治的象徴であると同時に理念として機能し、国家体系を構築するのに盛んに活用された⁴³⁾。高麗時代都邑風水の主

要原理になった風水図讖説は早くから中国にあり、韓国にも存在したが、高麗時代のように一つの時代を風靡する政治社会言説として盛行したことはない。高麗時代の裨補図讖説の論理は、大きく山川裨補説または裨補寺塔説と地気衰旺説で成り立っていた。当時首都を移転する問題や、様々な王宮築造とその経営に関する問題は、地気衰旺説、山川裨補説と組み合わせられていた⁴⁴⁾。

新羅末の僧侶道詵は「山川順逆の形勢」として地形地勢を見て、寺と塔などで風水的欠点を補う裨補寺塔説を唱導した。そのため裨補寺塔説は風水の形勢論と仏教（密教）の舍利塔思想の影響を直接受けたことが理解できる。裨補寺塔説は山川裨補説または裨補風水論であるともいう。その核心理論は、山と河川が対象地を中心として求心性をそなえ、十分に取り巻かれているのか、遠心性を見せていたり背を向けて逆らっていたりしていないかをまず調べ、背を向けていたり逆らっていたりするところには風水的補完物（裨補）を設置するのである。風水的対象地は主に都邑や寺院の場所であった。

道詵の裨補風水論は、羅末麗初の転換期に社会変革を率いる空間的論理を提供しただけではなく、高麗朝500年にわたって国土空間の計画と運用の原理であると同時に社会思想的イデオロギーとして大きな影響を及ぼした。『高麗史』において道詵は新羅王朝が没落し高麗が建国される胎動期に仏教と風水という二つの思想的要素を結合・運用し寺塔裨補説という新たな社会的言説を作り、実践した転換期の知識人として描写された。

地気衰旺説は地の気運が、時や場所によって衰弱し、盛んにもなるという時間と空間の結合論理である。個人や王朝がいくら明堂を占有しても、時が過ぎればその地の気運が変わるので、発福が終わり滅びてしまうことがあるという⁴⁵⁾。地気衰旺説はその地の気運が盛んである時期なのか、衰退する時期なのかを占う図讖の予言で変

わる。また地気衰旺説は風水明堂地の空間的移动を前提とした。高麗時代にはこのような地気衰旺説の影響を受け、首都を開京から西京（平壤）に遷都する問題が政治的争点となり、結局妙清（?-1135）の乱につながることになる⁴⁶⁾。地気衰旺説の論理を根拠とし首都開京のほかに異宮と仮闕を地方に何か所も設けた。

裨補寺塔説と地気衰旺説は互いに結合し、裨補図讖の属性を強く表し、支配権力者の政治的言説と結びつくことで、王京の延基や遷都のような都邑風水論として展開した。このような潮流を主導した社会階層は王族と貴族勢力であった。道詵が歴史上韓国風水論と裨補図讖説の始祖として認められるという事実は、韓国風水論の特色とアイデンティティを規定するのに重要な意味をもつ。

特に裨補風水論が高麗時代の風水言説として勢力を伸ばしたのは、政治社会的背景とうまくかみ合ったためである。高麗王朝は仏教の仏力信仰と風水の地力信仰を結合した理念を、国家の安寧と政策運営の基盤とした。高麗の太祖は、後三国を統一し高麗を建国した後、裨補寺塔説を基礎に、地方豪族の基盤となる全国の寺院を整備・再編した。裨補風水論が国土運営の上位の論理となり、王都である開京を守る都城計画案の理念的基礎を提供する一方、国都と地方を空間的に統合し王権の中央集中と地方豪族の効率的統御体系を構築する理念的装置として積極的に活用したのである。

高麗時代の裨補風水論の主流は、寺院と塔を手段として活用する仏教的風水景観の補完という手法であった。これは朝鮮時代の集落景観に一般的に適用された林や造山などの風水的裨補を行う手法とは違いがある。朝鮮が開国した後、漢陽（ソウル）の環境計画と構成には風水的裨補が主に適用されたが、これもやはり高麗王朝の仏教的裨補中心の政策とは区別される点であった。朝鮮朝に入り仏教的裨補は衰退の一路

をたどったが、風水的裨補は重要な構成原理として中央、地方を問わず広く受容されたのである⁴⁷⁾。

朝鮮前・中期の朱子学的墓地風水論

朝鮮前期に王朝の崇儒抑仏政策の基調で、高麗の裨補寺塔説と風水図讖説は急激に衰退した代わりに、朱子の風水観と朱子学思想に基礎を置いた風水論が朝鮮社会の風水言説を支配するようになった。朱子学的風水論は形勢論が中心となった墓地風水論であった。墓地風水論は、高麗時代の都邑風水論と対比され、朝鮮前・中期の風水論の空間的特徴を成した。

朝鮮前・中期の墓地風水を先導した社会階層は指導層として社会言説を主導した儒教知識人たちであった。観象監は風水学を専門的に扱う制度的機関ではあったが、観象監に所属した風水官員は身分と職位が低い中人階層であったので、社会支配階層として活躍した儒学者たちの権威と知識水準に及ばなかった。そのため官僚と儒教知識人が主導し、王室と士大夫中心の風水言説をリードしていくことになった。郷村社会に風水論が拡散し、村と宗族の墓地の風水的立地がなされ、裨補景観が造成されたのも、郷村に勢力の根拠地を置いた儒学者の役割が大きかった。

朝鮮初期であっても風水書を民家で所蔵したり個人で所蔵することは禁止され⁴⁸⁾、一般人が風水知識に接近することが非常に難しかった。しかし朝鮮前・中期になると、地理知識についての社会的需要が増加するにつれ、風水論も知識人階層に広く拡散した。特に地方の士族層の社会的成長が顕著で、郷村に勢力の根拠地を確保していく過程で風水は朱子学の枠内で儒教知識人たちに受容される過程を経験することになった。

朝鮮前・中期の儒教知識人社会において風水論は『朱子家礼』に準拠し受容された⁴⁹⁾。朱子

の風水観を正論とする朝鮮前・中期の儒学者たちの見解は鄭述（1543-1620）の言葉にも如実に表れる。

おおよそ先儒は地理説について明確な正論を下しました。朱熹は『家礼』に程頤が述べた「土質が良ければ神霊が安らかで子孫が繁栄し、土質が悪ければこの反対になる。土質が良いと言うことは、土色がつややかで草木が茂るのがその徴である。そしていろいろなことを追求する者は、場所の方位を選び、日にちの吉凶によって葬礼を行う時を定めるが、間違いではないのだろうか」という言葉を残しました。それゆえ、朱熹の論理はひたすら山や水に囲まれることを主に述べるだけで、どの山どの河川を見なければならぬという説を取っていないのです⁵⁰⁾。（『請勿改卜山陵疏』）

上の引用文でもわかるように、朝鮮時代の儒学者たちの地理説（風水）に対する態度と思考は、朱子の風水観が指針になっていたことを確認することができる。『家礼』に表れた朱子の表現を見ると、「土質が良ければ神霊が安らかで子孫が繁栄する」と述べており墓地風水の役割が認められる。ただし墓地に使おうと選ぶのは、土質が良いかという程度であって、風水的に墓地の坐向を調べたり、葬礼の吉日を選んだりなどの術法的形態は誤りであると述べた。鄭述はこのような朱子の表現を再度そのまま解釈した。墓地風水の基準となる主要な観点は「山が巡り水が取り巻いた」地形地勢を備えたところにあるだけで、具体的に山と水が風水的にどうであるのか調べるところまでは及んでいなかったのである。

朱子が風水を用いる目的と、風水に対する方法論的認識は『山陵議状』によく表れている。『山陵議状』は朱子が65歳の時（1194年）、宋

の皇帝寧宗に孝宗の王陵選定と関連し、風水の見解を示した文である⁵¹⁾。

風水はその方途としてたとえ術家の説であっても理致がないとは言えない。土地を選ぶうとするならば、まずその主勢の強弱、風気の集散、水土の深淺、穴の正偏、力量の完璧さとそうでないものを論じた後、その地の美醜を比較することができる⁵²⁾。(『山陵議状』)

引用文から理解できるように、朱子は風水説の論理を部分的に認めた。この文で朱子は祖先を敬う心で風水を活用し、場所を定めたと述べる。子孫として祖先の遺体をうまく処理しようとすれば、遠慮深く慎重に真心をこめて、安らかなるように計画を立てなければならないのである。風水は孝を実践する一つの方途として意味があり、術法ではあるが道理があるので、美しい地を選ぶので合理的であり、これを慎重に調べよということである。

中央または地方に根拠地を置いた朝鮮時代の儒教知識人たちは、風水の見解を一般的に共有した。実際に彼らの見解は風水的造営と管理に反映された。朝鮮時代の儒学者のうち、鄭述、張頭光(1554-1637)、李植(1584-1647)、尹善道(1587-1671)、権燮(1671-1759)、李重煥(1690-1752)、李瀾(1681-1763)などは、風水論に識見が深く、風水論を盛んに論じていた代表的知識人である。

儒教知識人は当時の社会的に盛行していた墓地風水論にどのような見解と基準もっていたのだろうか?朝鮮前・中期を代表する二人の人物である鄭述、張頭光を事例にして彼らの墓地風水論を挙げてみよう。

朝鮮前・中期の儒学者たちの墓地風水論に対する見解を知ることのできる断面は鄭述の文章に表れる。鄭述は、58歳の時(1600年)、懿仁王后が亡くなり陵の場所を選定する中、地

官(風水師)が移葬を主張すると、陵を直して使うべきではないと請う上訴を出したことがある。上訴文には当時の地理家の風水説に対する鄭述の見解が良く表れている⁵³⁾。

臣は以前より地理家たちが提出する説には二種類があるとの言葉を聞いております。客と主人が互に向かい合って礼をする形勢を見て、玄武、朱雀と青龍・白虎の形勢を見て、離合と集散の状況を調べ、円満に集まって水の漏れる隙間がなく、緻密に遮られているかを見るなどのことは、山家において非常に重要に思われていることです。八卦と干支、数理を使ってあれこれと酌量する妙理を解き明かし、方位と向背の名称を設定し順逆と吉凶の象を解釈するのは、山家でも参考にしていることです⁵⁴⁾。(『請勿改卜山陵疏』)

ここで鄭述は、風水説の二種の流派の中で形勢論は重要なもので、理気論(方位論)は参考にするべきものと見ていた。そのほかに禍福説を主張する後代の煩瑣な風水論議は正しいものではないとしており、世間をあざむくものであるため受け入れるべきではないと評価した⁵⁵⁾。朝鮮初の河崙(1347-1416)による『地理新法』の理気論が、国土立地過程で重要な論理として適用されたことがあるが、朝鮮中期になると儒学者の間では形勢論が優勢であったということを確認できる。このような鄭述の風水観は弟子である張頭光に継承され発展した。

張頭光は、朝鮮中期を代表する儒学者であって、性理学的宇宙観と自然学を最も体系的に著述した人物である。彼は周易の包括的な思想体系の範疇から風水を受容した。張頭光は、風水知識を活用し、住居地の立地を定め、故郷とその縁故地の様々な場所を風水的見地で言及もした。彼の墓地風水観を見ると、形勢論的な論理は肯定するが、葬礼の期日を先延ばしする発福

目的の行為は批判した。そして都邑の風水において林を造成して景觀を補完（裨補）する必要性を認めた。

以上に見てきたように、朝鮮前・中期に朱子学が社会思想を支配し、儒学者たちの風水論もやはり朱子の風水についての見解と、朱子学の範囲から逃れることはできなかった。朝鮮社会の宗法的支配秩序に基礎を置く朱子学の孝子像と結びつき墓地風水論が新たに台頭した。風水理論では朱子の見解に従って形勢論の風水が儒学者の間で重く取り扱われた。朝鮮王朝の初期に理気論はしばらくの間姿をあらわしたが、朝鮮中期に入って参考となる論理程度に取り扱われ、禍福説を主張するあまたの風水の論議は誤ったものとして警戒された。儒学者の風水実践の動機と目的は、亡くなった父母をよく祀る孝行心にあった。

朝鮮後期の住居風水論

朝鮮社会では、墓地風水が広く流行した。朱子学に準拠した儒学知識人の風水の基調とは異なり、現実には利己的・迷信的な発福の俗信が横行し、宗族集団間に山訟（訳注：墓地に関するトラブル）を引き起こすなど、社会的弊害と副作用が深刻であった。「人々が風水説を過度に信仰し、今の世の中の慢性的な病弊になっている。」⁵⁶⁾ という表現から見ても朝鮮中期の墓地風水は全般的に大衆化し、過度に盲信し社会的病弊が蔓延したことも確認できる。朝鮮後期の実学者たちは、このような墓地風水の社会的副作用と逆機能を激烈に糾弾、批判した。

墓地風水論の核心である発福論理に対する、鄭東愈（1744-1808）、洪大容（1731-1783）、李瀾、丁若鏞（1762-1836）などの実学者たちの理論的批判も辛らつであった。例えば李瀾は、朝鮮時代の風水教科書である『錦囊経』の核心論理として「亡くなった者の骨が気を得れば子孫は陰徳を受ける」という墓地風水論の感応論

に正面から反駁し、「今乾いた骨が腐ってしまい、痛みも痒さもわからず長い歳月を経て土埃になるが、どうして生存している者と互いに感じあつて禍福をもたらすことができるのか」⁵⁷⁾と合理的な論旨で鋭く批判した。

それでも実学者たちは、一方で住居風水論の合理的側面は活用しようとした。このような背景には土禍と戦乱という残酷な事件を経て、儒学者の中で可居地を探し山林（田舎）に隠居しようとする雰囲気蔓延し、これに必要な住居地選定と住宅建築に実際に風水知識が必要であったためであった。朝鮮前・中期の思弁的性理学に対する実学者の反省と批判もまた、風水論を生活に合理的に実用化する知識として導く一助となった。このような社会環境が朝鮮後期に村落風水論と住宅風水論の発達を先導する背景となり、この潮流を主導した社会階層は実学者たちであった。

彼らは墓地風水論を排撃し、相対的に村の立地選択と住宅建築において合理的な風水論議は受容し、実用的風水論を朝鮮後期社会に著述として提示した。これらの知識人社会の雰囲気は、自然村落に居住する住民にも影響を与え、風水を村の居住環境を管理する実用的な原理、かつ指針として運用するのに貢献した。

朝鮮後期に実学者は理想的な住居地を選択し生活しようとする実的手段として風水論議を受容して展開した。洪萬選（1643-1715）、柳重臨（1705-1771）、李重煥、徐有渠などを代表とする朝鮮後期の知識人は、利用厚生の実学的時代精神で中国の風水知識の中で生活に有用な面を受容し、村と住宅の立地を選択し、家を建てるのに合理的に活用しようとした。このように朝鮮後期の実学的風水論は、朝鮮前・中期に墓の場所中心の儀礼的・倫理的風水論と異なり、実生活に有用な住居風水論という特徴がある。実学者は居住地と住居環境の自然的・人文的な諸般の要素に対する詳細で客観的な風水論議を

中国の住宅風水書から批判的に引き出した。

18世紀初め洪萬選の『山林経済』（「ト居」）、18世紀中盤の李重煥の『択里志』（「八道総論」、「ト居総論」、「地理」）と柳重臨の『増補山林経済』（「ト居」）、19世紀初めの徐有渠『林縁経済志』（「相宅志」）につながる一連の著作は、朝鮮後期の社会経済的背景で理想的な住居地と居住環境の空間的・場所的・条件を叙述した実学的風水論の代表的成果である。上の著述には朝鮮後期の儒教知識人住居観がよく表れているだけでなく、居住環境の地理的・風水的立地に対する論議、そして理想的な居住地に対する地域情報が収録されている。彼らの風水的見解を順に見るならば以下の通りである。

洪萬選が著述した『山林経済』は、著者が田舎に住む考えを持ち、田舎（山林）での生活に関連した内容を編纂したものである⁵⁸⁾。この書には田舎で自給自足的生活を営むのに必要な住居、生業、養生、保健などの内容を網羅し収録した。『山林経済』は、当時の知識人社会に影響を与え、柳重臨の『増補山林経済』（1768）と徐有渠の『林園経済志』（19世紀初）の著述につながった。洪萬選は『山林経済』の冒頭部分に「ト居」編を置き、居住環境と住居地の選択に詳細な論議を提示した。ここには著者の住居観が間接的に反映されており、居住環境の要素である住居地の地理・地形的条件、道路条件、敷地形態、周囲の山水と建造物の環境、造景要素、住居地周囲の地形地勢、土質と水質などの多様な条件を、住居地選択において考慮しなければならない基準として提示した。

李重煥は『択里志』において士大夫が住むに足る村落が備えていなければならない諸般の地理的（地理）・経済的（生利）・社会的（人心）・文化的（山水）立地条件を詳細に論議した。その中で地理的条件になる風水的地形環境（地理）は、最も重要な立地要因として扱った。彼は朝鮮後期の知識人社会に広まっていた風水論議と

経験的住居知識を検討し全国の居住環境を論議し、村落立地論を体系的に構築したと評価することができる⁵⁹⁾。

『増補山林経済』は、柳重臨が1766年の洪萬選の『山林経済』を増補し編まれた書である。居住環境の論理と関連し、「ト居」編には術法的な内容も大幅に追加された。『増補山林経済』は『山林経済』の編成と異なり、最後の部分に「東国山水録」、「南師古十勝保身地」、「東国勝区録」を掲載し、当時の理想的な居住環境を備えた地域として知られた場所の情報を収録した。このことで、当時の『鄭鑑録』の十勝地言説が避難保身のための場所を探そうとする民衆の住居観だけでなく、山林（田舎）に隠居しようとする儒教知識人の可居地選定にも相当な影響を与えたものと推察できる。彼が居住環境と住む場所の選定に関して追加した内容は大部分中国の住宅風水書に叙述されたもので、中国の自然環境と社会文化的知識に基礎をおいていたために、朝鮮半島の条件にそのまま適用しにくい点もあった。この点は、徐有渠の『林園経済志』に至り批判的に検討され、風水的住居観に対する合理的基準が示された。

朝鮮後期の実学的風水論を代表する儒教知識人に徐有渠がいる。彼が著述した『林園経済志』の「相宅志」編には『山林経済』、『増補山林経済』のト居論と『択里志』のト居論・八道論を採録しただけではなく、その他の文献も多数参照し自身の論議を繰り広げた。徐有渠の住居観と居住環境の価値は、朝鮮の現実に適用する主体的観点を堅持した点、居住環境条件と地理的立地環境類型に対する論議を充実した点、全国の理想的住居地の情報を総合的に要約整理した点、術法的な風水を排撃して実用的・合理的な態度を堅持した住居観などに要約することができる。徐有渠の住居観を見るならば、居住環境を論議する際に、儒教知識人であって生活人としての合理的・実用的な態度で接近し、当時の

社会全般に広まっていた術数的見解に警戒し、捨て去るように勧告した。生活に最も重要である住宅の場所を選択する際も、实事求是な学問姿勢と利用厚生に住居観を堅持したが、やはり風水の禍福悦を警戒し批判した。

以上見てきたように、朝鮮後期の実学者の著述には村や家を立地させる場所、または住宅建築と関連した住居風水論の合理的・実際の受容態度と内容がよく表れている。実学者は住居観や居住環境と関連した主要な著述で中国風水論を批判的に受容し、特に李重煥と徐有渠の著述は、実用的な観点で朝鮮後期の村落立地と居住環境、住宅建築を体系的に論議し成果を上げた。

韓国風水論の特色は何か

以上のような論議を土台として、韓国風水論の特色は、東アジアに照らして実際の運用性、全般的な影響力と時代的多様性、社会政治的言説化、形勢論の優勢、裨補論の五点に要約することができる。

第一に、韓国は中国の風水論を導入し、自然風土と文化的背景に合わせて実際に運用し、社会的・空間的言説として用いることに集中した。反面、理論的な面では、中国のように独創的な見解を提示し風水論理を発展させることはできなかった。したがって韓国では風水論が運用された産物として、現地の明堂に対する地理情報を収録した遊山録、風水図讖記、王陵と門中墓地の山図（墓地地図）、実学者の住居風水論の著述などの文献記録だけでなく、全国の多くの自然村落で形成された風水地名、風水形局、風水説話などの民間伝承が伝わっている。伝統村落によくみられる風水景観もやはり、風水論の運用を証明する可視的な文化遺産となる。

第二に、風水論が韓国文化に及ぼした全般的な影響力と、時代ごとに多様な展開を見せたことも特色になるであろう。韓国は東アジアで風

水文化が最も花開いた国であった。類型的な景観として国土、王陵、地方の都邑、村落、墓地などと無形的な記録・伝承としての文献、地名、説話など、諸般の分野に風水が奥深くまで影響を及ぼした。空間的には国土から始まり地方の都邑、村レベルまで、風水立地と風水景観が波及した。階層的にもすべての社会階層の地理的認識と態度に反映した。高麗時代の裨補図讖の都邑風水論、朝鮮前・中期の朱子学的墓地風水論、朝鮮後期の実学的住居風水論のように、歴史展開過程で風水論の特性は時期ごとに多様な様相を示した。

第三に、韓国風水論は、社会思想とこれを主導する社会階層と合わさって社会政治的言説として影響力を持って展開した。時代思想として仏教・図讖と結合した高麗時代の裨補風水論、儒教と結びついた朝鮮前・中期の朱子学的風水論と、朝鮮後期の実学的風水論は、社会思想と社会言説が反映した韓国風水論の代表的な姿である。社会思想を唱導した階層集団として高麗時代の裨補風水論を主導した僧侶と王朝勢力、朝鮮時代に朱子学的風水論と実学的風水論を率いた儒学者階層は、社会言説を主導した代表的な社会階層と言えるだろう。高麗時代に裨補寺塔説は、仏力信仰と地力思想が結びつき、高麗王朝勢力の統治理念として社会思想的役割を果たした。朝鮮時代に風水地理説は朱子学的理念と結びついて儒学者に受容され、宗族社会集団の勢力化過程が組み合わされ、儒教的風水言説の特色を表している。

第四に、韓国風水論の理論的傾向は、中国の形勢論と理気論の中で、形勢論が優勢に運用された。三国時代にすでに形局に対する初期の事由が登場し、羅末麗初には山川の順逆を扱う形勢論的論理が支配した。朝鮮時代初期に、一時理気論が遷都過程に重要な論理として台頭したことがあるが、すぐに朱子学的風水言説が勢いを強めると、再び形勢論が風水論の重要な論

理として取り扱われた。この理由として、韓国は地形的に山が多く形勢論の適用が有用であったという点、新羅末に留学した僧侶知識人が中国広西地方の形勢論を習得して帰国したという点、朝鮮時代に朱子学が支配理念になり形勢論的風水論理が指針になったという点を挙げることができる。

第五に、裨補論は、形勢論と理気論に代表される東アジアと中国の風水論の普遍性に照らし、韓国風水論の特性といえることができる。中国から導入された風水論が韓国において空間論理として支配的地位を確保してゆき、裨補論は羅末麗初より高麗時代にかけて大きな影響力を行使した。朝鮮時代には、精緻に理論化された形勢論と理気論の中国風水理論が適用され運用されたが、裨補論もまた綿々と維持され集落景観の一般的構成要素として定着していた。東アジアにおいて展開された裨補論と対比するならば、琉球を除外した日本本土で裨補論はほぼ見られず、中国では裨補論を民間階層と地方社会まで広く実践されたが、韓国の高麗時代に見られたように、社会思想的に支配集団の統治理念であり国土運営の論理として機能することはなかった。それでも韓国の裨補論は精巧な理論的論理体系を持つことはできず、社会的・空間的応用と実践形態であるという限界もあった。

【注】

- 1) 東アジアの風水は、中国で理論が形成され、韓国、日本、琉球などの政治社会的・歴史文化的脈絡に合わせて受容され、展開した様相を示している。したがって中国から導入された風水思想と原理、概念と理論などは普遍性を帯びている。
- 2) 村山智順『朝鮮の風水』、朝鮮総督府、1931
- 3) 李丙燾『高麗時代の研究』(韓文)、亜細亜文化社、1947
- 4) 崔昌祚『韓国の風水思想』(韓文)、民音社、1984
- 5) Yoon Hongkey, The Culture of Fengshui in Korea: An Exploration of East Asian Geomancy, Lexington Books,

- 2006
- 6) 高麗時代の裨補風水論は、裨補寺塔説、地気衰旺説、地理延基説(風水的所応で都邑を延長する言説)などと合わさって、高麗前期には全国的な裨補寺院の整備と再編、高麗中・後期には王都の遷都、離宮設置の理論的基盤と社会的言説として広く活用された。
- 7) 何曉昕・羅雋『風水史』(中文)、上海文芸出版社、1995, p.160
- 8) 『三国遺事』巻一、「紀異二」、第4代脱解王
- 9) 呉尚学は、「アレゴリーの地形学—朝鮮時代風水の喝形論の探索」(韓文)(2015)において、既存の形局論で使われる用語を、伝統的に用いられた喝形論に直し、風水理論史的由来と根拠を明らかにした。
- 10) 新羅末に江西省で禪宗を学んで帰国した僧侶たちが開創した寺院は風水に従って立地し、風水裨補物を設置した事実も碑文に示されている。
- 11) 『高麗史』、「世家」、太祖26年4月
- 12) 『高麗史』、「世家」、顯宗13年5月
- 13) アン・ヨンベ「高麗・朝鮮前期理気派風水:『地理新書』・『洞林照膽』・『地理新法』の流行を中心に」(韓文)、圓光大学大学院仏教学科博士学位論文、2013、pp.280-283
- 14) 高麗時代から朝鮮時代初めにかけて天文・地理などの業務を担当した官庁である。世宗7(1425)年に名称を変え觀象監とした。
- 15) バク・ヨンウン『高麗時代陰紋制と科学制度の研究』(韓文)、一志社、1990
- 16) 各々の位階によって、遂行する風水関連の業務において、どのような差異があるのかについては、文献上で確認が難しい。
- 17) Yannick Bruneton, "Les moines géomanciens de Koryô- une étude critique des sources", Doctorat d'Études de l'Extrême-Orient, Université Paris 7, 2002
- 18) 金斗奎、『風水学辞典』(韓文)、飛鳳出版社、2005, p.621
- 19) ホ・フンシク、『高麗科学制度史研究』(韓文)、ソウル大学大学院国史学科博士学位論文、1980, p.117
- 20) 『文宗実録』、即位年9月8日
- 21) 『世宗実録』、18年8月8日;『文宗実録』、即位年9月8日
- 22) 『世宗実録』、20年1月20日
- 23) 『胎封謄録』、顯宗3年2月1日
- 24) ヤン・ウンヨン「鄭鑑録信仰の再照明」(韓文)、『伝統思想の現代的意味』、精神文化研究院、1990
- 25) 李丙燾『高麗時代の研究』(韓文)、亜細亜文化社、
- 26) 村山智順『朝鮮の風水』、朝鮮総督府、1931

- 27) キム・ナクピル「高麗の道教思想」(韓文)、『韓国思想史入門』、ソムン文化社、2006
- 28) 朝鮮時代の代表的な風水図識書であり予言書である。秘訣数十篇あまりが集成されており、風水、図識、陰陽五行、道教などが入り混じっている。著者不明で、民間に伝承され多くの写本が伝えられる。反王朝的な内容も盛り込まれており、朝鮮王朝において禁書として取り扱われ、朝鮮後期には鄭鑑録信仰が形成される理由となった。特に『鄭鑑録』に含まれた十勝地関連の秘訣は民間の人々に大きな影響を与え、書に示された場所に人口移動と住居地形成を誘発した。
- 29) 『高麗史』「世家」、睿宗元年3月
- 30) 地理学教授は風水専門人として最も職級が高く、その下に講師に該当する地理学訓導と風水を学ぶ学生として地理学生徒がいた。
- 31) 『太宗実録』、17年11月5日
- 32) ソン・ハンニョン『韓国道教哲学史』(韓文)、成均館大学校大東文化研究院、1987、pp.66-67
- 33) 崔昌祚『青烏経・錦囊経』(韓文)、民音社、1993
- 34) 同上
- 35) 金斗奎、『風水学辞典』(韓文)、飛鳳出版社、2005
- 36) 同上
- 37) 『宣祖実録』、33(1600)年9月21日の記事には、中国の羅経というものが、既存に使用していた輪図と似ているが、様々な様式が備わっているという表現があった。そして『英祖実録』、18年11月20日(1742年)の記事には、観象監で清より入ってきた5層の輪図を手本として作成することを請うたとの内容があった。
- 38) チョ・インチョル「風水向法の論理体系と意味に関する研究」(韓文)、成均館大学校大学院建築学科博士学位論文、2005、p.16
- 39) チョ・インチョル「朝鮮後期に制作された輪図に関する研究」(韓文)、『韓国文化』55、2011、p.162
- 40) 『林園経済志』巻6「相宅志」
- 41) 尹弘基『龍のころ』(韓文)、サイエンスブックス、2011
- 42) 十勝地は韓国の風水的理想郷概念の一つである。勝地という語は自然景観と居住環境が優れた場所を言うが、朝鮮中・後期の社会的混乱と経済的疲弊によって個人の安危を保全し、生活を営むことができる避難地を意味することもあった。したがって十勝地はすべて内陸の山間奥地に位置した。十勝地として示された場所としては、寧越の正東上流豊基の金鶏村、陝川伽倻山の萬壽洞の東北方、扶安壺岩下、報恩俗離山甑項周辺、安東の禾谷、丹陽の永春、茂朱郡茂豊北東方などがある。十勝地概念は朝鮮後期の民間階層に強く伝わり、居住地の選択と人口移動、空間認識に大きな影響を与えた。
- 43) チャン・チヨン『高麗・朝鮮の国土風水論と政治理念』(韓文)、新旧文化社、2015
- 44) 尹弘基、前掲書
- 45) 李丙燾、前掲書
- 46) 尹弘基、前掲書
- 47) 朝鮮時代に風水的裨補は、高麗時代のように政治理念として浮かび上がりはしなかったが、朝鮮時代の全期間にわたって集落の風水景観を補完するための実際的用途で広く用いられた。首都である漢陽でも景福宮を中心として裨補物が設置され、地方の都邑と村落に林と造山などが造成され、風水的裨補は韓国集落の伝統的文化景観を構成する一般的形態であり、機能的要素になった。
- 48) イ・サンテ「朝鮮初期の風水地理思想」(韓文)、『史学研究』39、1987、p.67
- 49) キム・ギョンスク「18、19世紀士族層の墳山対立と山訟」、『韓国学報』28(4)、2002、p.67
- 50) 『寒岡先生文集』巻2、「疏」、「請勿改卜山陵疏」
- 51) 金斗奎、『風水学辞典』(韓文)、飛鳳出版社、2005
- 52) 『朱熹集』
- 53) 『寒岡先生文集』巻2、「疏」、「請勿改卜山陵疏」
- 54) 同上
- 55) 同上
- 56) 同上
- 57) 『星湖僊説』巻9、「人事門」、「堪輿」
- 58) 『山林經濟』、「序」
- 59) 『沢里志』、「卜居総論」